

邦楽の新しい可能性を感じて

呉市音楽家協会 作曲家 坪北紗綾香

連日の雨も上がり、束の間の晴れ間が差した6月26日。この日、開館間もない呉市の新しい多機能ホール『くれ絆ホール』にて、箏・尺八コンサート vol.4 「つながる絆」(主催:尺八奏山会)が開催された。呉市の尺八奏者である森岡奏山氏が中心となって企画されたこのコンサートは、1960年代から今日に至る近・現代の邦楽曲によるプログラム構成で、邦楽作品の多彩な魅力が詰まった充実の内容であった。

第一部は、邦楽器の個性を存分に引き出し、邦楽に対する一般的な印象をいい意味で覆すような作品が並んだ。古典的な箏曲のイメージとは一線を画す躍動的なリズムが力強い、箏と十七弦による沢井忠夫作曲の「矢車」に始まり、山本邦山作曲による尺八独特の様々な演奏表現を駆使した尺八のみのアンサンブル「冴ふり」、続いてこのコンサートの隠れたテーマとも言える“親鸞聖人”を讃えた「帰洛の聖」(藤澤いちの作詞、木戸全一作曲)では、ソプラノとテノールの二重唱も加わり、趣の異なる楽曲が聴き手を飽きさせない。第一部の最後は、呉市制100周年を記念して委嘱された大曲「百色くれよん」(川崎絵都夫作曲)の演奏で中締めとし、邦楽の更なる可能性を感じさせるアンサンブルの連続であった。

第二部は、“親鸞聖人”をテーマとする二曲。今年の4月に誕生し、このコンサートが初演となった前田智子作曲「後世のいのり」、そして、2010年の委嘱作品である拙作・和楽器アンサンブルと混声合唱のための「受け継ぐご縁」(釋正念作詞、坪北紗綾香作曲)である。どちらも、親鸞聖人をテーマにしながらも、絆や縁といった人との繋がりを意識した作品であり、このコンサート後半にふさわしいプログラミングとなった。

”音を合わせる”という、音楽としての繋がりと、演奏者同士、またお客様との垣根を越え、ホール全てが“時間を共有する”という繋がり。囿らずも拙作の終章では、邦楽器の音色に人の声による合唱が響きあい、様々な思いが交差しあう中、コンサートは終演を迎えた。

演奏された6作のうち、3作にも及ぶ森岡奏山氏の委嘱作品。新しい曲に常に挑戦し続けたいというそのバイタリティと、力強い尺八の音色に、司会として間近に接した私自身も大いに刺激をうけたコンサートであった。

後に、ご来場者の「箏や尺八の印象が変わった」との感想を伝え聞いた。極めて率直な、また日頃は邦楽と縁遠い方々ほど素直に賛同できるご意見であろう。この、真新しいホールに相応しい、新鮮な驚きと発見に満ちた演奏会だったに違いない。